

## 内部評価の歴史探究で培った思考力を外部評価に適応させていく試み

本報告では、DP 歴史における内部評価で培った思考力をいかに外部評価と接続させるかについて、令和5年度 Group 3 の取組みを紹介する。

まず、DP 歴史の評価について確認しておく。DP 歴史における評価は、内部評価と外部評価からなる。前者は学校内で作成した成果物を IB 機構に提出する。生徒それぞれがトピックを選び、リサーチ・クエスション (RQ) を立てて歴史について探究するものである。具体的には、探究課題に用いる複数の資料を分析するセクション A、実際に史資料を用いて分析的におこなった探究をエッセイとして記述するセクション B、そして、自身の探究から明らかになった歴史学者が直面する課題について述べるセクション C からなる。教師の仕事は、アドバイザーとして生徒の探究に伴走し、適宜アドバイスをすることである。

これに対して後者は、すべて IB 機構が課す試験によって評価されるものである。具体的には、史資料分析とそれを基にエッセイを執筆する試験問題 1、抽象的な問いに対し具体的な歴史的出来事に言及しながら解く試験問題 2、そして、ハイレベルクラスのみにも課される地域学習について問われる試験問題 3 からなる。なお、試験問題 2 および 3 はともにエッセイ試験である。

さて、内部評価は、DP 歴史の授業だけでなく、Core 科目の一つである TOK (知の理論; Theory of Knowledge) とも関連付けながら探究を進めていく。「歴史上の出来事を偏向なく客観的に説明することは可能か」や「歴史では、何をもちて事実と見なされるのか」など、内部評価において生徒が歴史的出来事を分析する過程で直面した困難に、実は歴史学者も向き合っていることを学んでいく。歴史は「解釈に基づく学問」<sup>1</sup>であることをシラバスの冒頭に掲げる DP 歴史において、生徒たちは歴史に唯一絶対の答えがないこと、かといって歴史解釈や史資料読解の妥当性、倫理的観点から、何でもありでもないことを学んでいく。この解釈と批判的思考の重層性が DP 歴史の学習の中核である。

一方で、外部評価は限られた試験時間のなかで読み手に伝わる明瞭なエッセイを執筆する必要がある。また、じっくりと設問に向き合う時間が与えられず、独力で回答する点が大きく異なっている。ここに、一方では史資料批判に基づく慎重な考察を重ねる歴史の特性と、他方では「明瞭なエッセイ」という要求の間に乗り越えるべき課題が生じることになる。問いに正確に応答することと、内部評価で培った緻密な論じ方は維持しつつも体系的かつ明瞭に構成することが求められる。以上の要求に答えられないと、外部評価では「設問の要求を理解していない」「記述的・描写的」と評価されてしまい、重層的批判をコントロールできないと、「明瞭でない」「あいまいである」と評価される。本校の DP 歴史では、内部評価を軸に年間の授業を展開しており、適宜 TOK とも接続しているため、この内部評価と外部評価のギャップは、生徒にとっては想像以上に大きなものとして受け止められており、本年度の最終試験を受けた生徒たちの回答からも、それがうかがえた。

そこで、以上の課題に対応するために、エッセイ執筆でパラグラフ・ライティングをより強く意識させるべく、授業実践を積み重ねている。例えば、生徒たちが実施するプレゼンテーションの場面では、「目次」(アウトライン)の位置づけを高め、プレゼン後の議論でブラッシュアップを図ったり、アセスメントをしたりしている。また、生徒たちのエッセイを添削する場面では、明瞭な議論を構成できているかという観点をより強く意識してアセスメントしている。いずれも、内部評価の執筆に向けてより緻密かつ慎重に歴史的思考を積み重ねてきた「結果」をいかに相手にはっきりと伝えるかに焦点を当てている。

歴史学特有の思考力やスキルにこだわりながら、考え抜いたことの結果を適切に伝えるという汎用的なスキルも合わせて育成することは、DP 取得後に歴史について議論する際にも役立つと考えている。

---

<sup>1</sup> 『「歴史」指導の手引き』 p.6.